

# 流れ藻の発生時期と成長\*

抄録

吉村 晃一・金丸 誠司

## 目 的

昭和55年度から昭和57年度まで継続して行った本調査は、紀伊水道南西部沿岸域に出現する流れ藻（大部分がホンダワラ類）について、季節別の出現種・分布状態及び分布量を把握し流れ藻の形成過程を明らかにすることを目的として行った。

## 方 法

紀伊半島南西部にあたる枯木灘沿岸域を調査点（図1）として、流れ藻の分布・分布量調査を当水試「わかやま（88.82）トン」を使用して定線上の流れ藻を大きさ毎に計数した。また、飛航機により広域的に流れ藻の分布及び潮目の観察を行った。流れ藻の種類組成調査は、当水試「しお風（7.95トン）」及びよう船により、月1回程度タモ網により採集した流れ藻を、種ごとに湿重量等の測定を行った。打上げ藻調査では、採集地点別にその種ごとに流れ藻同様行った。流れ藻の標識放流調査は、発泡スチロールで浮力をつけた標識はがき（官製はがきをビニール包装）424枚を5月に日の御崎sw 10マイルで400枚、6月にすさみ沖ごく沿岸部で24枚放流した。

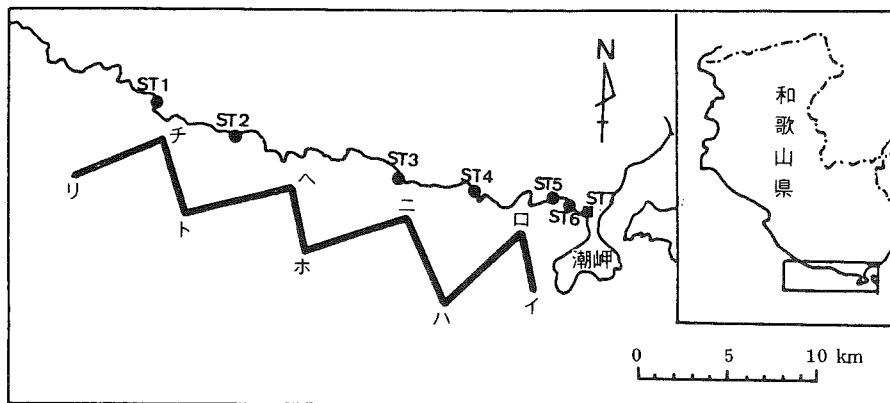


図1 流れ藻の分布調査線および打上げ藻調査点

- 流れ藻の分布調査線
- 打上げ藻定期調査点
- 打上げ藻連日調査点

\* 近海漁業資源の家魚化システムの開発に関する総合研究（マリーナランチング計画）費

## 結 果

これは、「昭和55～57年度近海漁業資源の家魚化システムの開発に関する総合研究(研究報告書)」に報告されている。その内容は、

### 1. 流れ藻の分布状況・分布量の季節変化

流れ藻は周年観察されているが、特に5～6月に多く見られその量も多い。流れ藻の大部分は30cm程度のちぎれ藻である。流れ藻は、沿岸部に多く、沖合に行くにしたがって少なくなる。

### 2. 流れ藻・打上げ藻の構成種の季節変化

流れ藻・打上げ藻は似かよった(主にホンダワラ類)種類で構成されているが、打上げ藻は、近くの藻場の構成種を代表しているし、流れ藻については、その藻場からのものと思われる種がほとんどであるが、他海域からのものと思われるものも一部含まれる。流れ藻で見られるのは、主に11種であり、年によりかなりその量は変動する。季節的には4～6月に出現する種が多いが、特にヨレモクが優占種となっている。冬季には、出現種が少なく、トゲモクが優占しているものの量的にも少ない。

### 3. 流れ藻の標識放流

流れ藻の瀬戸内海域からの流出を調査するため、標識はがき424枚を放流した。再捕枚数は28枚で再捕率6.60%である。放流点からの瀬戸内海域に流入するのが大部分であったが、高知県からの再捕の報告もあった。流れ藻の移動速度は、直線的に移動したものとして計算すると、0.5～20km/日である。